



子どもたちの“学び”の力になればと、藤原さんはノートなどの学用品を贈った

夢をかなえるための教育支援

「いよ、何して遊ぶ？」

カンボジアの首都プノンペンから車で約3時間。40度近くにもなる暑さの中、校庭でたくさんの子どものために開かれているのは、「なんとかしなきゃ！プロジェクト」著名人メンバーでもある俳優の藤原紀香さん。この日、挑戦した遊びは、カンボジア版羽根つき。小さな羽が行き交うたびに、歓声が上がります。自ら発起人となって「NPO法人 Smile Please」の藤原紀香世界子ども基金を立ち上げ、国連機関やNGOなど、さまざまな組織と連携しながら支援の輪を広げてきた藤原さん。2002年のア

特別レポート

文・写真= 徳田 小矢子 (JICA広報室)

藤原紀香さん

inカンボジア

一緒に、未来へ。

「世界の子どもたちに笑顔」を合言葉に、開発途上国の教育支援に取り組み藤原紀香さん。「自分が目にしたことを、日本人々に分かりやすく伝えていきたい」。そんな思いを胸に、今年5月、カンボジアに飛んだ。

フガニスタン訪問を皮切りに、仕事の合間を見れば、国際協力の現場に足を運んできた。

そして、今年5月にはカンボジアを訪問。実は、この地を踏むのは今回が3度目。藤原さんにとって、特別な思い出のある国の一つなのだ。

今から7年前、プライベートでカンボジアを旅した時、学校に行きたくても行けない子どもたちに出会った。彼らの「学びたい」気持ちを応援したい。さまざまな支援の在り方を模索する中、知人の紹介で、認定NPO法人JHP・学校をつくる会(以下、JHP)と出会う。そしてJHPとの力強い連携の下、「藤原紀香カンボジア子ども教育基金」を設



世界中、どこに行っても子どもたちは元気いっぱい。「日本では忘れてしまいがちな、人として大切な気持ちを教えてもらっています」



立。チャリティー写真展などを通じて地道に資金を集め、08年にはメーサン小学校の敷地内に新校舎「紀香学校」が完成した。

今回、藤原さんは3年ぶりに「紀香学校」の子どもたちと再会。一人一人に向かって、「この学校で、自分の夢に向かってよく学び、よく遊び、たくさんのお手伝いをします」と優しく語りかけた。「校舎を建てるだけでなく、これからも定期的にここに足を運びたい。そうやって、基金を支えてくれる日本の皆さんの思いも伝えたいですね」と話した。

助け合う日本とカンボジア

カンボジアでは、音楽や美術などの情操教育がまだまだ普及していない。JHPでは子どもたちが音楽に親しむ機会を持つよう、楽器・楽譜の寄贈や音楽教師の養成、マーチングバンドの指導にも取り組んでいる。

この日、藤原さんを特別ゲストに迎えて開催された音楽コンテストの会場には、青年海外協力隊の交久瀬早希さん(小学校教諭)の教え子たちの姿も。「カンボジア全体を変えることはできない。でも、私の学校とその周りを少しでも良くしていきたいんです」と意気込んでいた。また、JHPプノンペン事務所でも音楽分野の支援を担当する協力隊員・西浦りかさんも、「昔から音楽とカンボジアが大好きでした。協力隊の募集を見て「私が行かなくて誰が行くの!」と思って、迷わず応募しました」と笑顔で話してくれた。

東日本大震災が発生した3月11日、二人の隊員はカンボジアにいた。現地の人々から「今度は私たちが助ける番だ」と温かい言葉をかけてもらい、日本に対する思いやりの深さを感じたという。その話を聞いた藤原さんは、「日本人がこれまで支援してきたことが、きちんとカンボジアの人に伝わっている。続けることで次につながる。みなさんの頑張りで、きっと何かが変わると信じています」と激励していた。

明日へつながる思い

藤原さんは、プノンペン市内にある国立母子保健センターも視察。1997年に日本の無償資金協力で建設されたから、JICAの母子保健分野の支援の拠点となってきたこのセンター。2010年からは「助産能力強化を通じた母子保

健改善プロジェクト」が進行中だ。

建物の中に入ると、生まれたばかりの赤ちゃんに寄り添い添い添い幸せそうな母親や、保育器の中で懸命に生きようとする未熟児の姿があった。「スタッフの努力もあり、この10年で随分とケアが行き届くようになりました」と小山内泰代・JICA専門家。しかしカンボジアではまだまだ妊産婦の死亡率が高く、安心で安全なお産が重要な課題だという。「母親の産む力を引き出せるような助産師の育成に取り組んでいます。今までカンボジアにはなかった、女性を中心にしたケア」というコンセプトをいかに根付かせるか。それが最大の壁だという。

一方で、日本が見習うべき点もある。「家族みんなで陣痛を乗り越え、お産に立ち会おうという伝統は素敵です」と小山内さん。ドラマで産科医の役を経験し、多くの取材を通じて日本の産科医療の現状に触れた藤原さんは、「安心して子どもを産める環境の在り方を、私たちはカンボジアからも学ばべきですね」と語った。

藤原さんはこの国を訪れるたびに、新たなエネルギーが生まれているように感じるという。一人一人が「なんとかしなきゃ!」と思って動いた力が、確実に明日へつながっている。藤原さんはこれからも、カンボジアの人々と一緒に、未来へ進んでいく。

※途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクト。実行委員会は、NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)、JICA 国連開発計画(UNDP)。詳細は、nantokashinakyu.jp。



国立母子保健センターのカナル所長(中央)から年間7,000件ものお産に対応していると聞き、藤原さんは驚いていた

Norika's photos



わが子の寝顔を見守るお母さん。そこには、言葉では表現できない幸せな空気が流れていた



撮影用のテレビカメラに子どもたちも興味津々



2人仲良く縄跳び。勢いよくジャンプ!